

保育の中の「自然」、 「自然」の中の保育

白井美沙子

(保育士)

『幼児の教育』創刊〜二〇一一年の記事（現在 TeaPot にて閲覧可能なもの）から、「自然」をタイトルに含む記事（計一三五本）を読み、保育の中で「自然」がどのように語られてきたのか探ってみました。興味深い記事がたくさんありましたが、ここでは明治・大正・昭和・平成、それぞれ一本ずつ紹介します。

明治：「自然界」

五月の自然界

摩訶生

『山城の宇治の辺では、名高き茶摘が始まっ

て、人々はさぞ忙しいことであろう、忙しい中にも、能く^よ勉めて後の暫し^{しば}の間の休みに、どんな心持がするだろう。自然の間に働き、自然の間に休むは、楽しいものである。』
 『人気^{ひとけ}稀^{まれ}なる山里の自然界の光景は、殊^{こと}に楽しいものである。』

『自然界に対して、嗜好をもつ様に、子供に心懸くるは、其^{その}一身の将来の為のみでなく、それが即ち国家の為であると思える。殊に現在の社会の情況を見ても感ぜらるることが多^くある。』

（『婦人と子ども』第一巻第五号（一九〇一年）から）

白井美沙子（しらいみさこ）
 まこと保育園（石川県）保育士。本稿執筆時は、お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科人間発達科学専攻 保育・児童学コース 博士前期（修士）課程に在籍。

山里の暮らしの中にある「自然」を賛美する、著者の心情がうかがえます。

明治になって「自然」が「自然界」の意でも使われるようになったという話はよく聞きますが、「自然界」があるということは「非自然界」つまり「人間界」があるということでも、人そのものや、人のつくり出す世界の外に、「自然」を見いだしていったと考えられます。「自然」を想う心の背景には、当時なりの「現在の社会の状況」があつたようですが、著者がどんな状況を指してこの記事を書いていたのか、百年以上前の時代に思いをはせてみるのもよいかもかもしれません。

大正…「自然観察」

自然界の観察

平島権藏（東京女高師教授）

『今度幼稚園令が生まれて其の中に観察とい

う新たな項目が置かれました。其の観察というのは何んなものを、何う取り扱うのかという事に付いて多少の疑問を持たれる方がいらっしゃる。』

『植物は如何にして冬の寒さを越すかをみやるのも興味があります。要するに自然界に注意することが、興味を持つて観ることが物を分らせて呉れるのです。』

（『幼児の教育』第二十六巻第十号（一九二六年）から）

著者は生物学の教授であり、さまざま動物植物の生態を紹介しながら、それらを観察することの意義を述べています。

文中にあるように、幼稚園令（一九二六年）が出され、その項目に「観察」が導入されたことを踏まえています。保育の中でも、「自然」を観察という客観的な行為の対象とすることが、広まり始めたと言えるかもしれません。

昭和・領域「自然」、科学

「自然」領域指導の問題点

大場牧夫（桐朋学園幼稚園）

『昨今「科学性をのばす保育」が検討されたり、小学校の理科教育との関連性の問題が研究されてきたが、とくに今般の幼稚園教育要領の改訂にともない「自然」のねらいと内容について、それをどう受けとめ具体的にどのような指導をしたらよいか研究することがますます必要になってきた。』

『新しい自然領域の指導は、単なる理化学・生物学のための科学性教育ではない。むしろ広い意味の科学的思考・科学的認識への芽生えをそだてることにある。』

（『幼児の教育』第六十三巻第六号（一九六四年）から）

幼稚園教育要領（一九五六年、一九六四年改訂）

に領域「自然」が導入されたことから、その内容や取扱いについて述べた記事が多くなっています。全体として、幼児の科学性を育てようという当時の流れが見え、「自然」と科学の結び付きが強い時期であると感じます。

一方で、都市化・開発の進行により「自然」と人との距離が離れつつあることから、保育では「自然」にもっと触れさせて、情操を育みたいという保育者の思いもあつたようです。その思いからか、昭和の終わりから平成にかけて、「ふれあい」という言葉が出てきます。

平成…ふれあい、かかわり

保育の日常を問う

— 環境としての自然とどう向きあうか

新井孝昭（筑波技術短期大学）

『子どもたちに豊かに感じる心を育てるためには、自然とのかかわりは確かに大切だと思

う。しかし、それはただ与えていけばよいというのではなく、保育者が自然の中身をどの様に子どもたちに示しているのかと、常に問い直すなかでなされなければ意味がない』

『「自然」という言葉を、人の影響をまったく受けていないもの、人間の手がいっぴきでないもの、というような意味でとらえれば、日本（地球上と言ったほうがよいのかもしれない）のなかでその様な場を探すことはまったく不可能と言えるほど、現在の自然環境は人間によってその意味を（無自覚的であれ）変えられてしまっている。』

（『幼児の教育』第九十四卷第十二号（九九五年）から）

平成に入り、「環境」としての「自然」が注目され、田舎も都会も、「自然」とのかかわりが薄れているという意識が高まっています。

私自身は、この頃に北海道（道北）で生まれ育ちましたが、室内で人形遊び・ままごと

などをして過ごしていることが多かったように思います。日常生活で「自然」とのかかわりと言えるものはあまり無く、外遊びといっても、子どもたちは公園にゲーム機やカードなどの玩具を持ち込んでいたようでした。

以上で紹介したのはごく一部ではありますが、保育の中で、長きにわたって「自然」が話題に上ってきたこと、時代の移り変わりの中で、「自然」の捉え方も変わってきたことがわかりました。

最近、『幼児の教育』二〇一五年夏号でも、『自然体験』って何だ？』という特集がありました。自然体験とは何か、を考える上で、そもそも「自然」とは何か、ということも考える必要があると思います。今日至る所で、「自然」という言葉が使われますが、「自然」と離れているからこそ、安易に「自然」と言ってしまうのかもしれない。しかし、人が

認識できる一点・一側面を指して「自然」と呼んでよいものでしょうか。


私見を述べますと、「自然」とは、動植物や土・水・空気・風といった個々の事物・事象だけでなく、人間をも内包する、人が知覚・制御しきれないもの……ではないかと考えています。そして自然体験とは、「自然」の持つ（物質・時間などの）循環の中に人が生きていくことを実感すること、「自然」の大きさと人間のちっぽけさを体感することではないでしょうか。

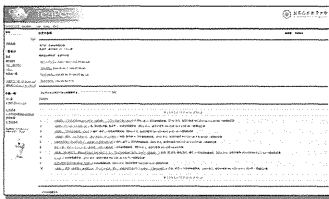
概念的になつてしまいましたが、具体的に表そうとすると、「自然」の一点・一側面しか記述できないというジレンマがあります。ただ、あえて言うならば、お庭の一本の木に登り、誇らしい気持ちになることは、木登り体験。森の中の一本の木に登り、森の広大さと己のちっぽけさを知るとは、自然体験であると思います。

保育もまた人の営みであり、「自然」の中にあるものとして捉えてみてはどうでしょう。

*旧字体は新字体に、歴史的仮名遣いは一部現代仮名遣いに改めました。また、適宜振り仮名を振っております。―編集部―

幼児の教育 バックナンバーを
WEBページで公開中

「幼児の教育 TeaPot」で
検索 



<http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/handle/10083/52377>

明治34年発行の創刊号から、現在、平成23年発行の第110巻第4号までご覧になれます。